

原田博史

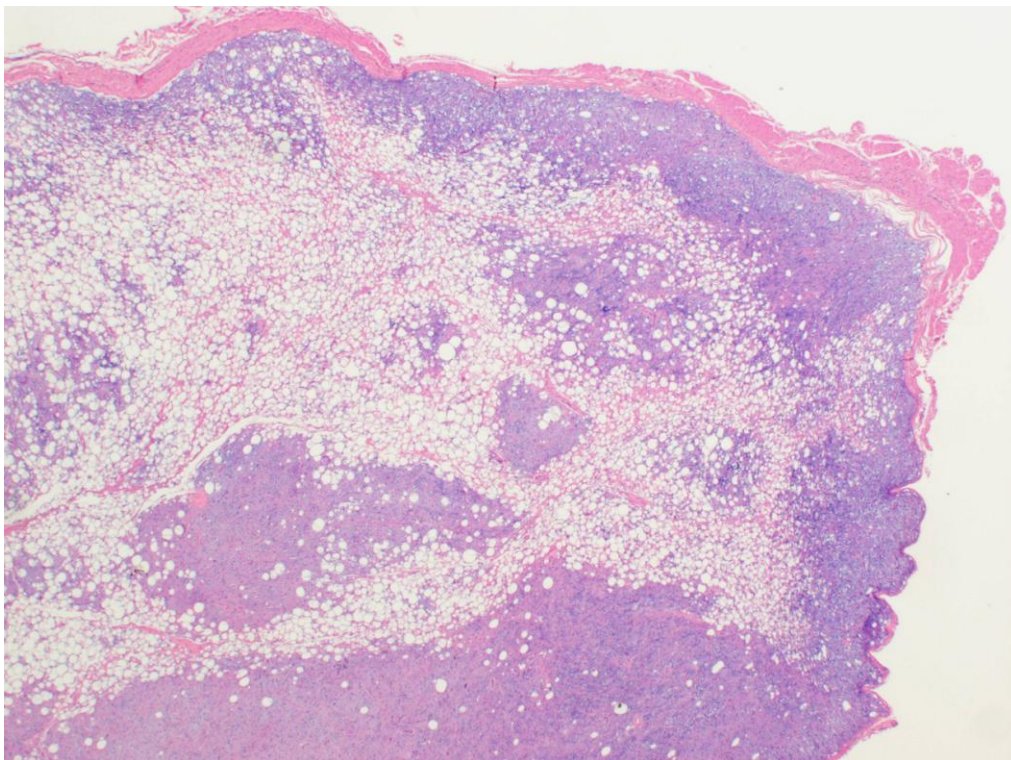
(生長会 病理センター 府中病院 病理診断科)

【症例】 46 歳、女性

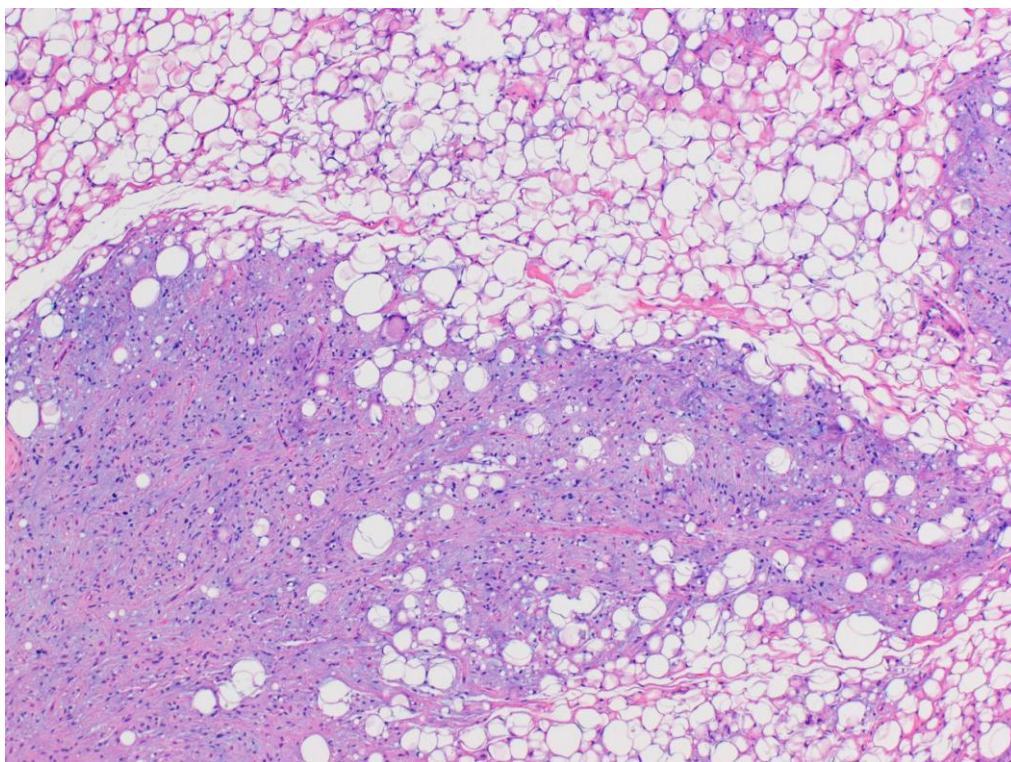
【病歴】 数年前より右舌下面に腫瘍を自覚していたが、放置していた。その他特に自覚症状はなかったが、知人に摘出を勧められ、地域の総合病院を受診した。腫瘍は 15x12x10mm 大、境界明瞭で、摘出時に周囲組織との癒着はみられなかった。なお、配布標本は摘出組織のほぼ最大断面である。

【病理組織所見】 腫瘍は薄い被膜様の結合織に覆われた腫瘍性病変で、結合織の外側には少量の骨格筋が付着していた。内部には成熟した脂肪織と紡錘形細胞が錯綜する密な領域の 2 種の成分がみられ、これらは不規則に混在、また互いに移行していた。紡錘形細胞は異型に乏しい類円形ないし紡錘形の小型核を有し、両領域の境界部分ではしばしば疎に配列し、myxoid な像を呈した。この部分では一部の細胞は大小の胞体内空胞を有し、これが核を圧迫、変形させることにより脂肪芽細胞様の形態を呈した。核分裂像はほとんどみられなかった。

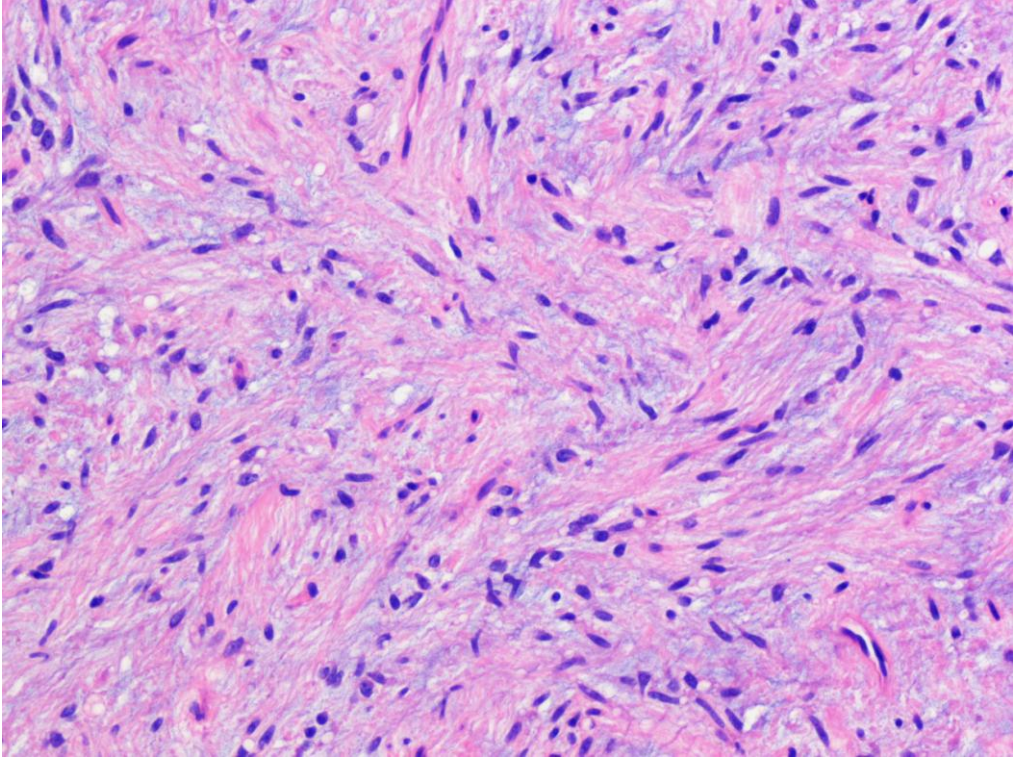
免疫組織化学的には、脂肪織とともに紡錘形細胞は S100 蛋白に強陽性を呈した。CD34 および平滑筋 actin ではそれぞれ腫瘍内に含まれる血管内皮および血管壁のみが陽性反応を呈し、紡錘形細胞はいずれにも陰性であった。MIB-1 標識率は全体に低く、平均 1%以下であった。



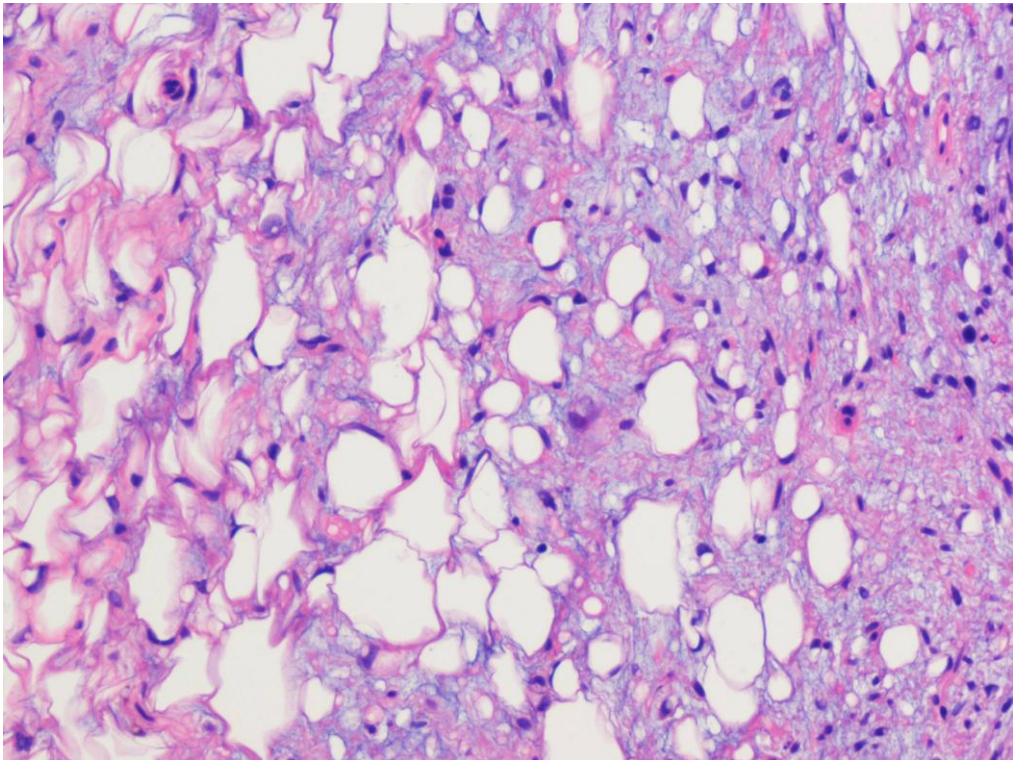
HE 像 1



HE 像 2



HE 像 3



HE 像 4